

おはん (道行思案餘)

〽浮名を流す川水も

桂にあらぬ綾瀬川

月も朧に春の夜の

夢ばかりなる手枕を

結ぶ帯屋の長右衛門

〽背を下せば流石にも

姿つくるふ振袖に

風のふくみてほら

空に雨持つ鐘の音も

九つこゝに北東

隅田に手繰の

帆影さへ

明日待たぬ身の何かせん

長命寺とも頼まれぬ

世は牛島の浮世ぞと

はかなき事をかこつにぞ

〽ほんに思へば昨日今日

〽まだ三味線の手ほどきも

お前に習ひそれからが

御師匠さんへ生田流

琴や豊後の文句にも

〽みんな女子は一生に

男といふは唯一人

二人と肌を触れるのは

どんな本にも

年々の草双紙にも無い事を

よく見て聞いて悪戯な

〽顔にも咲きし初花は

杉田の梅の香も知らぬ

〽その江の島へ雪の下

あの石部屋で

丁度マア

堅いお前に合宿も

弁天さんの引合せ

それから旅の夢見草

〽初も見事な

おつゝら馬よ

蒲団重ねて

跡附け

お江戸上りのナア

三度笠ナアエ

縞さん

紺さん

中乗さん

遣つてかんせ

〽ほうらんせ

〽知らぬ伊勢路を道もせも

覚めて内外の義理詰に

「コレお半

道々も言ふ通り

思ひ直してこゝから早う帰つてくれ

聞き分けてたもや

〽お半はなんと

泣いじやくり

袖に涙を持ち添へて

顔打ち眺め

長右衛門さん

なんぼ私が年が行かぬと思つてからに

お前許りが死なしゃんして

こちや

やゝ産んで長らへて

居らりよつかいなコレ申しそりや

可愛いのぢやない憎いのぢや

小さい時から子心に

長右衛門さんが鼻負ぢやと

言へばぢらして悪う言ふ



よい間に早くと歌市は

懐中押へて

急ぎ行く

「お半覚悟しや

見つけられじと手を取って

乱るゝ雨の糸柳

帯の綾瀬の川浪に

二人が名をや立ちぬらん。